２　深草幼稚園

学校運営協議会や地域の方の保育参画から園児の育ちを見つめる
～保育参画を教育課程に位置づける試みを通して～

（１）研究主題設定の理由

深草幼稚園は伏見区の北東に位置し、地域には稲荷山や竹林などがあり、疏水沿いは春になると桜のトンネルとなり、豊かな自然に恵まれている。また、園区には名神高速道路やＪＲ奈良線、京阪電車などの交通機関も縦断している。京都市街地や大阪や奈良などへの通勤も便利な住宅街である。また、地域で採れた野菜などを軒先で販売している農家もあり、のどかな雰囲気が感じられる。

そのような落ち着いた住宅街で過ごしている当園の園児たちは家庭で大切に育てられ、素直に自分の思いを表現し、穏やかな子供が多い。また、他児や大人に対して親しみをもって接する。しかしながら友達同士のトラブルを避けようとしたり、自分で考えて行動することができにくかったりする姿もみられる。そこで、自分で考えて行動する力や豊かな心を育むことを教育目標に盛り込んでいる。家庭では子供を大切にしようとするが、子育てに自信がもてなかったり、どのように接してよいか戸惑いがあったりもする。

本園は、深草町民の要望により、昭和４年設置認可を得て、昭和５年に「深草幼稚園」として開園し、昭和６年に京都市に編入され、「京都市立深草幼稚園」となった２年保育の幼稚園である。

深草幼稚園学校運営協議会は、平成１９年１０月３１日に設立した。以来、地域の方々には本園の幼稚園教育を理解して様々な協力や温かい思いを寄せていただき、毎年、運動会の競技参加や園外保育の引率、預かり保育のボランティアなどの保育参画をしていただいている。また、年２回の学校関係者評価も含め、保育充実に向けての助言や協力を得ているところである。

また、深草地域の『ＮＰＯ法人京都・深草ふれあい隊　竹と緑』や『市民農園　風緑（かざみどり）』には、筍掘りや野菜の栽培、収穫など子供たちに充実した自然体験を提供していただいている。そして、地域の各種団体には深草地域のふれあい事業や交通安全の会など、子供たちが社会体験できるような機会を設けていただいている。

このように、学校運営協議会や地域の方々が本園の教育を理解し、保育に参画していただくことで、子供たちが遊びや活動をより一層楽しむ様子が見られ、更には深草地域での活動においての触れ合いやかかわりの機会を親子で楽しみにする姿も見られる。

しかしながら、振り返ってみると、それらは一過性のイベント的な活動となり、子供の育ちや学びを見つめ、次に活かすといった丁寧な取組になっていないのではないかという懸念についても感じられていた。

そこで、学校運営協議会や地域とのかかわりの中で子供の育ちをみつめ、子供の育ちにとっての意義を見出し、様々な取組を教育課程に位置付けると共に、地域に開かれた教育

課程の実効性を確かめていきたい。さらに、この研究を通して子供たちが深草地域に育つことを実感しながら、深草地域の一員としての素地が芽生えることにつながればと考える。

文部科学省教育課程企画特別部会　論点整理の中では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として「社会生活との関わり」の中で、「(前略) いろいろな人と関わりながら、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に一層の親しみをもつようになる」「四季折々の地域の伝統的な行事などへの参加を通して、自分たちの住む地域の良さを感じ、地域が育んできた文化や生活などの豊かさに気付き、一層親しみを感じるようになる」ことが提言されている。地域とのつながりやかかわりの視点から、まさに本調査研究においての本園の役割や重責を大いに感じるところである。

（２）学校運営協議会の取組

①　設立の経過

平成１９年１０月３１日　　深草幼稚園学校運営協議会設立

＊　設置の趣旨と目的

○　開かれた幼稚園の推進

○　地域の教育力を幼稚園教育に導入する

○　地域の幼稚園としての活性化を図る

○　幼稚園教育の内容の充実

＊　学校運営協議会の組織

協議会委員　会長１名　副会長２名　協議会委員８名

推進委員　８名

幼稚園教員　３名

＊　推進委員会の構成

○　読書推進委員会

○　地域活動推進委員会

○　保育支援推進委員会

○　研究・校種間連携推進委員会

② 深草幼稚園の教育目標及び学校運営協議会組織図

京都市立深草幼稚園　平成２８年度　教育目標

健康で、心を豊かに広げ、自分で考えて行動する子どもの育成

深草幼稚園学校運営協議会

子どもも保護者も地域もみんなが笑顔になり、育ち合う幼稚園つくり

協議会委員（理事会）

会　　長	岩見敏雄
副 会 長	村上晶一　鈴木正弘　（奥景子園長）
有 識 者	相原弘子
保護者代表	八木友佳子
地域代表	久保穂積　美濃敦子　小西愛子　山下敦子
学校園代表	久保薫深草中学校長　寺田潤子深草小学校長 林朋子教頭

推進委員会

地域活動推進委員会

理事	岩見　敏雄
〃	鈴木　正弘
〃	久保　穂積
推進委員	深拇　信夫
幼稚園代表	平田　裕紀

保育支援推進委員会

理事	村上　晶一
〃	美濃　敦子
〃	小西　愛子
〃	八木　友佳子
幼稚園代表	林　朋子教頭

読書推進委員会

理事	山下　敦子
推進委員	辻　猪一郎
〃	近藤　八重子
〃	平山　千津子

研究・校種間連携推進委員会

理事	相原　弘子
〃	深草小学校寺田潤子校長
〃	深草中学校久保薫校長
推進委員	深草小学校２年生担任
幼稚園代表	林　朋子教頭・平田裕紀

③　推進委員会の取組内容

＊地域活動推進委員会

深草の地域の自然や社会に触れる機会としての園外保育の引率

≪ＮＰＯ法人「竹と緑」での筍掘・七夕の笹採り≫

≪ＮＰＯ法人市民農園「風緑（かざみどり）」でのさつま芋掘り≫

≪伏見消防署見学≫

≪稲荷山登り≫

深草の地域の自然に触れる経験の場の交渉

≪柿採り≫

（稲荷山）

＊保育支援推進委員会

預かり保育の保育参画　１４：３０～１５：３０

≪ボール遊び≫≪なかよし遊び≫

≪昔あそび（こままわし、あやとり、お手玉、折り紙、紙飛行機など）≫

＊読書推進委員会

預かり保育の保育参画１５：３０～

≪絵本≫≪紙芝居≫　１６：００

（柿採り）

＊研究・校種間連携推進委員会

[研究]　　園内研究の指導助言

[校種間連携]　小学校２年生との交流活動

中学校２年生のチャレンジ体験

（七夕笹採り）

（園内研究）

（中学生チャレンジ体験）

④　平成２８年度深草幼稚園学校運営協議会事業計画

月	読書 15:30～16：00	地域活動	保育支援 14：30～15：30	研究・校種関連携	園行事 地域参加行事
4		こいのぼりセレモニー12 日（火） 疏水沿散歩遠足 18 日（月） 筍掘り 20 日（水）			始業式　8 日（金） 入園式　11 日(月) 始まりの集い 19 日(火)
5					第一回運営協議会 25 日(水) さつま芋苗植 18 日（水） 親子遠足 26 日（木）
6				附属中チャレンジ体験 29 日(水)～1 日(金) 稲荷小交流活動 稲荷保・稲荷小 30 日	土曜参観　11 日(土) 人形劇鑑賞会と幼稚園説明会　20 日(月)
7		七夕の笹とり 5 日（火） 宿泊保育 21 日(木) ～22 日(金)	ボール遊び 14 日（木）	深草小交流活動 8 日（金）	七夕の集い 7 日(火) こどもひろば 9 日（土） 宿泊保育 21 日（木）～22 日（金）
8					登園日　2 日（火） 第二回運営協議会 26 日（金）
9	（辻・山下）15 日(木)	消防署見学 8 日（木） 雨天決行		深草小交流活動 6 日（火）	祖父母参観 21 日（水） 大根種まき 2 日(金)
10		稲荷山 19 日(水) 柿とり	お年寄りとの交流 24 日（月）		運動会　8 日(土) ☂15 日(土) 深草ふれあいプラザ 16 日(日) 京都鉄道博物館 25 日(火)

					創立記念日　25 日(火)
11	（近藤・平山） 15 日(火)		昔遊び　24 日(木)	藤森中チャレンジ体験・深草中チャレンジ体験 深草小交流活動 25 日（金）	サツマイモ掘 17 日(木)
12		もちつき 6 日(火)			もちつき　　6 日(火)
1	（近藤・平山） 24 日(火)		昔遊び 19 日（木）		こども展見学 12 日(木) ふかふか美術展 24 日(火)～25 日(水)
2	（辻・山下） 14 日（火）			深草小交流活動	節分　3 日（水） 生活発表会 23 日(木) お別れ遠足 28 日(火)
3	お別れ会 10 日（金）	お別れ会 10 日（金）	お別れ会 10 日（金）	お別れ会 10 日(金)	ひなまつり 2 日(木) 第三回運営協議会 10 日（金） お別れ会　10 日(金)
備考					

（預かり保育）

（３）研究の内容

①　学校運営協議会や地域とのかかわりの中で園児の育ちをみつめる

（以下事例内の園児の名前は仮名、学校運営協議会の方はイニシャルで示す）

ア　学校運営協議会と園児たちをつなぐもの

年長児が年少児の時に種を蒔き、育てていたえんどう豆が実れば、みんなで豆ご飯パーティーをしようという保育計画をたてていた。

入園式に来ていただいていた学校運営協議会の方が絵本室前の小さなさやのえんどう豆を見て、「これは楽しみやな」「豆ご飯ができるのか？」と園児たちが収穫すること、そしてその後の園児たちの楽しみを想像されていた。また、Ｉさんと Ｍさんは「小さい子が食べるのを見ていると可愛いなぁ。３月のお別れ会でも一緒に食べたやんか」「え？そんな風に思えるようになったんかいな。そんな言葉、初めて聞いたで」「そうかぁ？小さい口でちょっとずつ食べるの、かいらしい（可愛らしい）」やんか」と会話されていた。

５月７日（金）にたくさん実ったえんどう豆の様子を見て、これ以上このままにしておくとおいしい豆で味わえないと判断し、急遽、１０日（火）に収穫し、豆ご飯パーティーをすることに決めた。

学校運営協議会の方も園児たちが幼稚園で育てていたえんどう豆のことをご存知だったことや、先日の会話もあり、収穫を一緒に喜べればという思いから急ではあったが、豆ご飯パーティーに来ていただくことにした。電話連絡をして、ご都合のつく方にご案内した。

「なかよし会がいいのと違うかな」　５月１０日

豆ご飯パーティーに「１１時３０分に来てください」と学校運営協議会の理事と推進委員の方にお願いしていた。三々五々、７名の学校運営協議会の方が来てくださり、園長室で待ってもらうことにした。

園児たちや教員の会場の準備が整うまでの間に、４月に教職員で話題になっていた学校運営協議会という名前について、園児が覚えやすいようにするためにネーミングを考えたいと提案した。すると「“なかよし会”がいいのと違うかな」「小学校でも“なかよし会”として１年生や他の学年にもかかわっているから、その方がお家の人も同じあの人たちだとわかるのじゃないかな」「家で“なかよし会の人”という話題が出た時に幼稚園でも小学校と同じ人にやってもらっているのはわかりやすいかな」とご意見をいただいた。みなさんの思いが一致したので、なかよし会に決まった。

「それでは、今日から園児たちには“なかよし会”として紹介します。」とみなさんを遊戯室へとお招きした。

〈考察〉

自然の成り行きから、豆ご飯パーティーに来てほしいという急なご案内にもかかわらず、７名の方が来て下さった。みなさんの園児たちへの思いをうれしく、ありがたいことだと思った。

年長組の園児たちは幼稚園でかかわってもらっている方々の名前を少しずつ覚えているようだが、学校運営協議会という組織名が覚えにくく、どうすればよいかと４月から教職員たちで話し合っていたところであった。できれば学校運営協議会の方々と一緒に名前を考えたかった。入園式には参列していただいていたが、園児たちに直接、かかわっていただくのは今年度初めてである。第１回のかかわりでちょうどよいということから、園児たちが呼びやすい名前をつけることをお願いした。さっそく発案してくださり、会長、副会長、そして理事の方々が来てくださったことで決定となった。

園児たちの呼びやすさや保護者にも園児に地域の同じ人が小学校にも幼稚園にも携わっていることがわかり、伝わりやすいという思いから“なかよし会”がよいと意見を出してくださった。私たち教職員は異動もあり、長年、園児たちにかかわることはできかねる。園児たちにとって呼びやすいというだけでなく、幼稚園から進学していった先でもかかわったり、お世話してもらったりできる園児たちの幸せや地域の方の深い思いへのありがたさを感じたひとときであった。

「ハーナちゃん…ハナちゃん」　５月１０日

なかよし会の方を年長児が一人一人誘い、テーブルに案内し、着席してもらった。一つのテーブルに“幼稚園兄弟（年長児と年少児の１年間通してかかわるペア）”が２組、なかよし会の方が一人集まった。

５月生まれの人がお当番になろうと教員が呼びかけると、なかよし会のＭさんもミアと並んで立ってくださった。そして二人の「いただきます」のかけ声にみんなで豆ご飯を味わった。

Ａさんは豆ご飯を一口食べられた時に「うわぁ、甘っ！甘いお豆やねぇ」と同じテーブルの園児に高い声で嬉しそうに話された。それを聞いて豆が嫌いだったマコトが、思わず口に運んだ。

Ｉさんは、両隣に座っている年少児の子どもに声をかけられた。Ｉさんが「アヤカちゃん…アヤカちゃん」と呼ばれる。アヤカは呼ばれていることがわかっているようだが、恥ずかしいのか返事をしないで食べている。

続いてＩさんは反対隣のハナに「ハーナちゃん。…ハナちゃん」と声をかけられた。ハナはブスッとして座っている。それを見て教員が「どうしたの？」と尋ねるとＩさんがハナのことを「いやぁ、豆ご飯が嫌いなんやな」と代弁される。「そうなんや」と私がハナのほうを見るとハナは体をくねらせて「嫌い」と言う。教員が「でも少しは食べたんやなぁ」と受け止めるとハナはうなずく。その間Ｉさんはずっとハナの様子を見てくださっている。そうしている間に教員が来て「食べられた？」「がんばろう！」とかかわった。

〈考察〉

食事を始める前の挨拶をする当番を「５月生まれに」という教員の言葉に、なかよし会のMさんが出てきてくださった。園児の目線にたって一緒に会を楽しもうという思いが伝わり、雰囲気が和らいだことが感じられた。「フランクにやろう」と申し出てくださったことが、園児との距離を縮めていくと嬉しく思った瞬間だった。

Ａさんは豆ご飯を口に入れられた途端、豆の甘さに感嘆の声を上げられた。「甘っ！」という声に“おいしい！”という思いが込められ、豆が苦手だったマコトも思わず“食べよう”という気持ちになったのだった。Ａさんの一言でその場が盛り上がった。周りの園児たちはウキウキしており、５歳児のマコトはＡさんに豆を褒められたことで自分たちが認められた思いになり、えんどう豆を育てた満足感を感じることができたのではないだろうか。同じものを食べて思いを共有することが、親しみを芽生えさせることにつながるのではないかと思った。

Ｉさんは、４歳児のアヤカやハナの名前を始めから知っておられたのではなかったようだった。同じテーブルで、Ｉさんの両隣に座っているアヤカやハナの名札を見て呼ばれていた。名前を呼ぶことで親しみが湧いたり、仲良くなったりできると思い、かかわってくださっていたようだ。今年度、なかよし会の方に初めて出会う４歳児のアヤカやハナ。アヤカはまじめで凛とした表情をする園児である。Ｉさんに名前を呼ばれて返事を返すことやＩさんと目を合わすことなどはできなかったが、表情から名前を呼ばれることが嫌ではなく、まだ打ち解けられずにいて、恥ずかしいと思っているだけのように感じられた。Ｉさんは、ハナが豆ご飯を嫌いなこともすでに把握されていたようだった。ハナの困りを察して、気持ちが変わればと思う配慮もありながらの優しい「ハーナちゃん」という呼びかけだった。ハナには苦手な豆ご飯であり、戸惑いが感じられる場面だったろう。しかし、側にいるＩさんが何とか気持ちを盛り上げようとかかわってくださっていた。自分の素直な思いを出しながらＩさんのそういった思いを感じる優しいかかわりにハナが出会えた。Ｉさんとは初めての出会いだったが、なかよし会の方が園児たちと親しくなろうと思いを寄せて話しかけてくださる温かさや優しさに包まれた会となった。

「ひらがなで書いてくれへんか」　５月１０日

園児たちが食べ終わり、みんなで『ごちそうさまでした』の挨拶をした。

その後、Ｉさんが私に「先生、この名札（ご自分の『学校運営協議会　会長　I』と書いてある名札）な、ひらがなで書いてくれへんか。字が読める子どももおるやろう」と言われた。私は「なるほど。そうですね。」と。Ｉさんは「ひらがなやと子どもも読めるしな」と提案してくださる。「確かに、そうですね。分かりました。用意します」と伝えた。

〈考察〉

会の最後にＩさんがなかよし会の名札をひらがなで書き、園児にもわかるようにと伝え

てくださったことから、今まで漢字で書いた名札を何気なく見過ごしていたことや園児に分かりやすくという基本的なことに気付けていなかったことを恥ずかしく感じ、大いに反省した。親しみを感じられるために名前を呼び合えるよう、大人の名前をひらがなで書いた名札を提案してくださった。名前を覚え、呼び合うことは園児となかよしになれるきっかけだと今更ながら感じ、Ｉさんの思いにありがたさや嬉しさを実感した。

〈まとめ〉

園児たちにとって、よりわかりやすく、呼びやすく親しみがある存在であり、保護者にも誰のことで、どういった形でかかわってもらっているのかがわかりやすいということから学校運営協議会の名前が“なかよし会”となった。地域の子供を、地域の方が大切に見守り、育ちを支えてくださるという学校運営協議会の方々の温かい、優しい思いが幼稚園だけでなく、小学校、中学校と将来に渡って続いていくありがたさや子供の幸せをかみしめた。

また、園児への接し方も園児の目線になって一緒に楽しんだり、園児の気持ちや思いを受け止めながら、かかわったりされたなかよし会の方々の愛情を感じた。園児となかよし会をつなぐものは、継続して思いをかける姿勢やまずは大人からの愛情を注ぐことや園児の目線になることであった。このような園児と大人が思いをつなげるための第一歩となった豆ご飯パーティーだった。

学校運営協議会が、園児たちや保護者たちに安心感がもてる存在となることがまず大事であり、そのためには、園児たちと保護者、教職員と学校運営協議会が仲良くなる地盤づくりが必要である。それを土台に園児の育ちが芽生えていくのだと考える。園児の育ちにつながる土台を築くこと、体制をつくることが管理職の重要な役割だと実感した。

イ　地域と園をつないで得た園児の深い学び　～４歳児のエピソードから～

園児たちが地域の自然に触れ、季節を感じながら様々な自然体験をできるようにと願い、長年、『ＮＰＯ法人　京都・深草ふれあい隊　竹と緑』や『市民農園　風緑（かざみどり）』の方々にお世話になっている。竹と緑の方々には、筍掘りや七夕の笹採りを、風緑の方々には、サツマイモの苗植え・栽培・収穫、大根の種まき・収穫（親子）などの自然体験をさせていただいている。

２年保育の４歳児にとって、地域の様々な場に出かけ、いろいろな方とかかわることは初めての経験である。深草地域やそこでお世話になっている方々を知り、身近に感じたり、親しみをもったりしてほしいと願っている。そこで、まずは、５月１８日の園外保育で、サツマイモの苗植えをさせていただく風緑の畑と、そこで主にかかわってくださる K さんとの“出会い”を大切にしたいと考えた。

「うーん・・・Ｋさんの顔、よく見えへんなぁ」　５月１７日

明日、風緑の畑へ出かけるということを伝える前に、「みんなは畑って知ってる？」と私からクラス全員に投げかけた。すると、知っている、知らない両方の声が上がった。畑とはどんなところかを続けて尋ねると、ナミは「あんな、私、おじいちゃんと、こうやって土を掘ったりしたことある」と言った。その声を受け、風緑の畑へのイメージを膨らませ、明日への期待感がよりもてるようにと願い、私は、昨年度の写真を数枚見せながら、風緑という畑が近くにあること、歩いて出かけること、野菜を育てさせてもらうことなどを知らせた。その話を聞き、アイコが「あ！知ってる！行ったことある。お兄ちゃんの大根掘りで行った」と言った。

その後、風緑の畑で特にかかわってくださる K さんの写真を見せ、野菜のことをなんでも知っている野菜名人だと伝えると、「トマトのことも？」「ブロッコリーも？」「大根も？」「ピーマンも？」と知っている野菜の名前が園児から次々と上がった。私は、「そうだよ。そして、この前、筍掘りに行ったでしょ。あの時お世話になった方とも K さんは知り合いなんだって」と言うと、ソウタロウが「え～？じゃあ、仲間やったん？」と聞いたので「そうだよ。みんなで幼稚園の子どもたちのこと、大事に思ってくださってるんだよ」と返した。

降園準備を早く終えた園児が、さきほどの写真を見に集まってきた。ナゴムがＫさんがくわをもって畑仕事をしている写真を透かして、「うーん・・・Ｋさんの顔、よく見えへんなぁ」と言った。
ソウキが「（くわを指さし）畑に悪者が来たら、これでやっつけてくれるの？」と聞くので、私は「畑の悪者ってなんやと思う？」と聞き返すと、顔の横で両手を上げ、親指と人差しで〇をつくって見せた。

それを見て、ソウタロウが「虫のこと？」と聞くと、ソウキがうなずく。その後、ソウタロウは写真を見て、「なんか（畑の向こうに）山が見える」と言った。いろいろな気付きを受け、私は「明日、風緑へ行くのが楽しみやね。サツマイモの苗植えも楽しみやね。」と投げかけ、『でてこいおいも』の絵本をみんなで読んだ。絵本の中の、アリがサツマイモを守っている場面を見ると、園児たちからは「ほんまかな」「へぇ～」などの声が上がったので、「これも本当にそうか、明日、Kさんに聞いてみようか」と私から提案し、降園した。

＜考察＞

年間を通じて出かける『市民農園　風緑』は、４歳児にとって、地域を感じるにはより身近な場・人となると考えた。そこで、風緑での出会いを大切にしたいという思いのもと、初めての園外保育に、より期待感をもてるように、園外保育前日に畑やKさんの写真を見せ話し合いの場をもつことにした。その環境と教員の投げかけが、園児たちの風緑への興味や関心へとつながった。

入園前、兄に付き添い風緑の畑に行ったことを思い出したアイコ、教員の言葉から、以前の筍掘りと風緑の畑を同じくくりと捉え、『仲間』という言葉を発したソウタロウ、写真からKさんの顔を見てみたいと感じたナゴム、大好きなヒーローものとKさんを重ねてイメージしたソウキ、など興味や関心の先は、個々それぞれであった。しかし、どの姿からも、明日への期待感が感じ取れる。このことからも、経験が少なくイメージがもちにくい４歳児にとっては、有効な環境、援助であったといえるのではないだろうか。

さらに、サツマイモを植えたいという意欲にもつながるよう、絵本をみんなで読んだことから、新たに疑問に思ったことを、またKさんに聞いてみたいという明日への期待感へとつながったように感じる。

「Kさんに聞いてこよっと」　５月１８日

朝から全園児で風緑の畑へサツマイモの苗植えに出かけた。K さんに教わりながら、みんなでサツマイモの土づくりや苗植えの準備をした。その間、私は、土に炭をまく効能を園児にどう伝えればよいかなど、疑問に思ったことや感じたことなどを、気さくにK さんに話しかけ聞いていた。その様子を横目で見ていたアヤカが、苗の植え方がわからなくなった時、「Kさんに聞いてこよっと。Kさ～ん」と声をかけに行った。

水やりが終わり畑周辺の草花で遊んでいた時、アイコ、アヤカは、アリが畝を歩くのを見つけ、知らせてきた。私は「ほんまやね。そういえば、昨日の絵本に載ってたこと、K さんに本当にそうか聞いてみたら？」と二人に投げかけた。アイコ、アヤカは照れくさそうに顔を見合わせた。すると、そばにいたソウキが「ねえ、アリがサツマイモを守ってくれるの？」と聞いた。K さんは「そうだよ。虫も野菜にとっては大事なんだよ。クモもよく嫌がる子がいるけど、大事にしてほしいな。ミミズも畑を耕してくれる大事な虫なんだよ。だから、虫も大事にしてね」と言われると、周りにいた園児から「え

～！ミミズ？！」と驚きの声が上がった。それを聞き、ソウタロウが「あ！じゃあこの虫は？」と畝を歩いていた黒い虫を指さした。Kさんは「その虫はどうかな？」と周りの園児に投げかけられた。私は「Kさんって、野菜名人だけじゃなくって虫のこともよく知ってる虫博士だね～。ソウキくん、Kさんが昨日の写真と同じもの（くわ）持ってられるよ。これのことも聞いてみたら？」と言うと、ソウキは「これで悪い虫やっつけるの？」と聞いた。「これは、畑の土を耕したり、畝をつくったりする時に使うの」というKさんの言葉を聞き、「へぇ～」とうなずいた。私は「そうなんだって。いっぱい教えてもらえてよかったね」とソウキや一緒に聞いていた周りの園児たちに伝えた。

＜考察＞

初めて出会う場や人に対して、ソウキのように自然にかかわれる園児もいれば、アイコのように照れくささを感じる園児、ソウタロウのように友達の姿を見て安心してかかわれる園児など様々な姿があった。しかし、初めての場や人に対して慎重に行動する面があるアヤカが、自らKさんにかかわりに行った姿を振り返ると、前日に写真を見ながら風緑に興味がもてるように話し合った経験や、Kさんに対して気さくに話しかける教員の姿が、アヤカに安心感を与えたように思われた。

また、昨日読んだ絵本の話題を教員が投げかけたことで、園児の中に、Kさんは野菜以外の虫のことについても詳しいのだというKさんへの新たな関心につながった。その時のかかわりを通して、園児の興味や関心を引き出すかかわり（投げかけ）をされるKさんの人柄に触れられたことは、教員自身の学びにもなった。

「Kさんは虫博士」　５月１９日

昨日、風緑の畑で経験したことを振り返ったり、確かめたり、そこで出会ったKさんに思いを寄せたりできるようにと願い、朝から、昨日の園外保育の写真にコメントやイラストを加えたものを、可動式ボードに掲示し保育室中央に置いておいた。登園してきた園児は、いったんボードを見るが、さほどじっくり見ることなく通り過ぎていっていた。

そこで私は、朝の身支度をする園児たちに「昨日、風緑へサツマイモの苗を植えに行ったね。Kさんにいろいろ教えてもらったね」と声をかけながら一緒に見ることにした。最初は、「これ〇〇ちゃん」「ここ私が写ってる」と誰が写真に写っているのかについて興味を示す園児が多かった。そのうち、写真と一緒にかいてあるイラストについて興味がわいてきた。「これは鳥」「これ、おひさま」などとイラストを順に指す園児たちに、私は「畝にしいたこのシートは、鳥が苗にいたずらしないように敷くんだよ、って言ってられたね」「昼間のおひさまは暑いから、苗がしんどくならないように、っていうためでもあるんだよ、って言われてたね」「夜は寒いからお布団のかわりだったよね。Kさん、いろいろ教えてくれはったよね」などと、昨日Kさんから教わったことなどを、イラストと照らし合わせながら、振り返った。そばにいた園児とクモのイラストを見ながら、「そうそう。アリもクモもミミズも、みんな野菜にとって大事って言われてたよね。虫も大

事にしてねって」と話していると、アイコが「Kさんは虫博士」と言った。すかさず「そうそう。野菜の事もよく知ってはるけど、虫博士でもあったよね」と私も昨日の経験を思い出すように答えた。

朝の身支度が終わった園児から遊びだす中、アイコ、ユミ、アユムが写真ボードの前に座って写真を見ながら時折、指をさし話し始めた。アイコが「うちにもクモが出たんだよね～。黒いのが」と言うと、ユミが「え～！うちにもいたよ」と答えた。それを聞き、アユムは「アユムんち、アリもいたよ」と話し、しばらく三人は虫の話題で盛り上がっていた。

「大丈夫じゃない？だってＫさんがいるもん」　５月１９日

個々の思いをみんなで共有することで、より風緑の畑やＫさん、サツマイモのことなど経験したことを思い出せるようにと願い、降園前、クラス全員で集い、ボードを見ながら昨日の園外保育での経験を振り返る時間をもった。

私は「今日も暑かったね。今頃、昨日植えたサツマイモ、どうしてるかな。大丈夫かな」と全員に投げかけると、すかさずサトミが「大丈夫じゃない？だってＫさんがいるもん」と答えた。私は「そうか。Ｋさん、みんなのおいもを守ってくださってるもんね。きっと水やりもしてくださってるね。みんなは、ありがとうやね。でも、この声は届かないかなぁ。畑はここから遠いもんね」と言うと、ナゴムが、Ｋさんが写っている写真を指差し、「ここに言えば聞こえるんじゃない？」と言った。ナゴムの子どもらしい発想を受け止めたいと思い、私は「そうか！じゃ、みんなで言ってみる？」と言うと、クラスの園児たちは写真に向かって「ありがとう～！」と叫んだ。すると、ハナが写真に耳を傾けるしぐさをしながら「（Ｋさん）いいよ～、やって」と笑顔で話した。私は「そう言ってくださってたらいいね。また、みんなで時々お水やりに行こうね」と園児たちに声をかけた。

＜考察＞

登園する園児の様子から、写真をボードに貼っておくだけでは、園児は興味を示しにくいことがわかった。そのような環境を整えると共に、教員が振り返る機会を設けたことで、初めてじっくり見たり、昨日の出来事を思い出したりすることができた。園児たちが、地域の方とのかかわりを喜んだり、思いを寄せたりしたことを、再度教員が言葉で園児に返すことにより、地域の方への親しみがわくのだと感じた。

また、クラス全員での振り返りの姿から、「Ｋさんならきっと野菜を見守ってくださる」

という、園児たちなりのＫさんへの信頼感やＫさんへの感謝を届けたい思いに触れられた。地域の方への親しみが芽生えてきているのを感じた。

「Ｋさんから教わったこと」　５月３１日

幼稚園の畑でジャガイモ掘りをした時、土の中からたくさんのミミズが出てきた。ソウキがミミズを指でつまんで集めていると、サトミが「ミミズは畑を耕すんだよ」と言った。それを聞き、私が「Ｋさん、そう言ってられたね」と言うと、周りから「ミミズさん、ありがとう」と声が上がった。

その後、教育実習生が、“野菜いっぱいのハンバーガーをつくろう”という活動をしたとき、ダイチが、赤い画用紙を帯状のようにハンバーガーに挟んで糊づけをしていた。それを指差し「これ、シート（※）やねん。虫が来ないようにするシート。でもこれは食べられるシートやねん」と言った。

降園前には、クラス全員で絵本『いもむしれっしゃ』を読んでいると、お話に出てくるクモを見て、アイコが「あ！クモだ。クモは虫を食べるんだよね」と叫んだ。

シート（※）：５月１８日サツマイモの苗を植えた時、Ｋさんが畝に不織布のシートをかけてくださった。その際、シートには、①鳥が土中の虫を探しに来て、苗にいたずらしないようにするため　②昼間の日よけ　③夜の防寒　の役割があることを教わった。

＜考察＞

サトミ、ダイチ、アイコの姿から、風緑での活動は、園児たちにとって初めての体験が多く、新鮮で、より印象深く心に残ったことがわかった。また、畑のことをよく知っているＫさんから教わったことは、園児たちの心に強く響いていることを実感した。風緑という場で、知識だけを得るのではなく、直接、見たり触ったりして本物に触れられる機会を大事にし、Ｋさんと連携してきた。そのことが、園児の野菜や虫への関心が高まるきっかけとなった。風緑は、園児の学びを促す大事な地域の場であることが再確認できた。

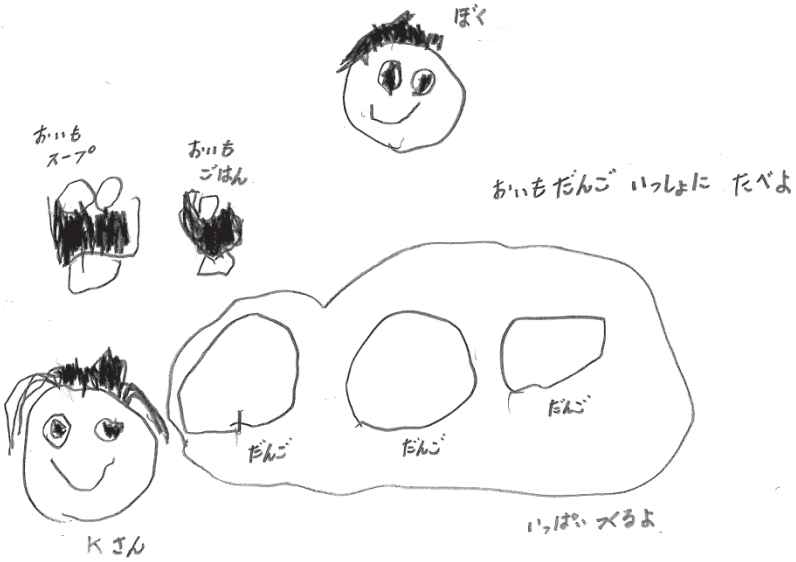
さらに、その後、風緑での学びを園児が遊びや生活に活かす姿から、教員の計画的、意図的な環境やかかわりが園児の育ちにつながることを実感した。

＜まとめ＞

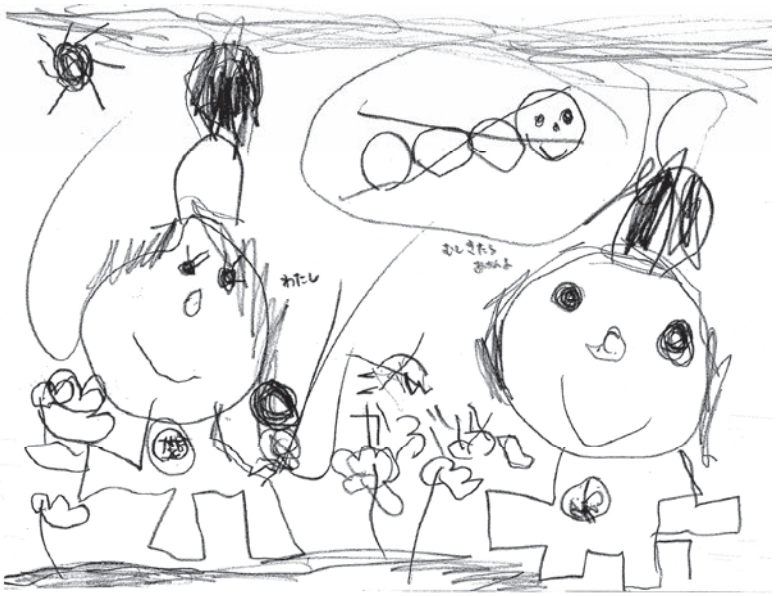
４月に入園した４歳児は、５月になり、さまざまな遊びや生活を通して教員に安心感や信頼感をもつようになった。そのような時期に教員が地域のＫさんと親しむ姿を見て、園児たちはＫさんへの安心感や信頼感を築くことができた。教員が園児たちと一緒に地域の場でかかわり、遊び、楽しんだことでＫさんへの親しみがしっかり根付いていった。だから

こそＫさんから教わり、一緒に見て触れて感じて得た経験は、園児たちの心に大きく響き、その後の遊びや生活に活かされていった。Ｋさんという人を通して得た学びは園児の思いや心に深く蓄積され、主体的な遊びに反映された。

一方、園外保育が一過性になるのでなく、事前事後の幼稚園での遊びや生活がつながるようにさまざまな環境や援助を工夫してきた。園児の中に思いが残り、関連したものに出会った時に体験がよみがえったり、確認できたりする姿がみられ、教員が意識しながら保育を構築することで園児の学びが深くなるということを改めて実感した。



【Ｋさんへの手紙　「(おいもパーティーで) おいもだんご一緒に食べよう。いっぱいつくるよ」】



【Ｋさんへの手紙　「(みんなの大根に) 虫きたらあかんよ。」】

ウ　地域の一員としての自覚の芽生え　～５歳児のエピソードから～

例年、『ＮＰＯ法人　竹と緑』に七夕の笹飾りのための笹をもらっている。園児が一人一人家庭に持ち帰る笹と幼稚園で飾る大きな笹をなかよし会の方の引率のもと、もらいに行っている。今年度、毎年なかよし会と一緒に行く七夕の笹採りの活動を見直し、園児にとってより意義ある取組にするため、今まで園児たちが過ごしてきた生活や遊びの中での、園児の意識や心の動きを改めて振り返りたいと考えた。

〈活動の流れ〉 **活動**　教員の言葉かけや思い　園児の言葉や思い

５月

「ヒナノちゃんは M さんにお茶とこのお弁当と豆ごはんのおにぎりを渡してね」

豆ごはんパーティー

なかよし会の人と一緒に食べられて嬉しかった

６月

手紙を書いて知らせたい！

カレーパーティーにもなかよし会の人にきてほしい！

「なんて書こう？」

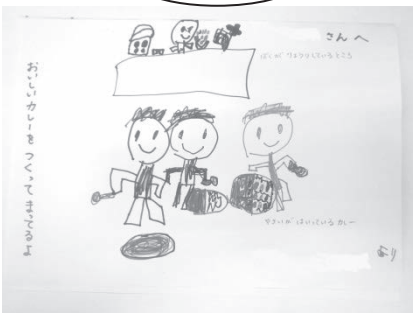
「カレーパーティーに来てください」「おいしいのをつくって待っています」

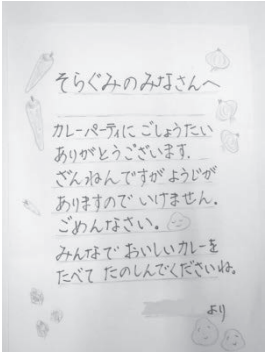
招待状をかく
子どもが１、２人でなかよし会の１人に向けて絵をかく

「A さんの住所は…リュウキくんの家の近くだね」と言いながら宛先をかく。

家の近くで T さんに会ったわ

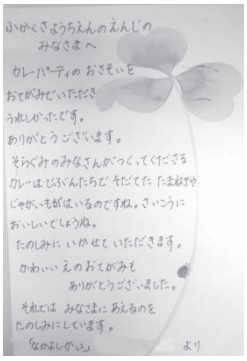
幼稚園からの帰り道で M さんを見たよ




そらぐみのみなさんへ

カレーパーティに ごしょうたい
ありがとうございます。
ざんねんですが ようじが
ありますので いけません。
ごめんなさい。
みんなで おいしいカレーを
たべて たのしんでくださいね。

より


小かくさようろえんのえんじの
みなさまへ
カレーパーティの おさそいを
おてがみでいただき
うれしかったです。
ありがとうございます。
そらぐみのみなさんがつくってくださる
カレーはじぶんたちで そだてた たまねぎや
じゃがいもがはいるのですね。さいこうに
おいしいでしょうね。
たのしみに いかせていただきます。
かわいい えのおてがみも
ありがとうございました。
それでは みなさまに あえるのを
たのしみにしています。
「なのはなかい」

より

残念ですが、パーティーには行けません。おいしいのをつくってくださいね。

お手紙ありがとう。
楽しみにしています。

6月後半

七夕の笹飾りつくり

グループの友達と一緒に虹の輪つなぎをつくろう！（1グループ１２８枚の細長い色紙）

やったー！できた。
ながーくなってる！

できたらこの笹（教員の用意した笹）に飾ってみよう！

あれ？この笹には長すぎて飾れない。

天井まで届くぐらいの大きな笹が欲しい！

なかよし会の人に大きな笹を持って帰ってきてほしいな

じゃぁカレーパーティーでお願いしてみる？

それがいい！そうしよう！

カレーパーティー

手紙ありがとうって言ってくれはった！嬉しいな！

なかよし会の人を会場（遊戯室）まで案内しよう！

「みんなのつくったカレー、最高においしいわ」って言ってくれはった！

「（笹採りの日）天井まで
届くくらいの笹を持って
きてください！

い・い・よ！

やったー！！

地域の小学校や保育園との交流活動

<校長先生の終わりの挨拶>

「深草幼稚園のみなさん、稲荷保育園のみなさん、今日は稲荷小学校にお越しいただいてありがとうございました。幼稚園のみなさん、保育園のみなさん、１年生のみなさん。みなさんには共通していることがひとつあります。それはみなさんは深草の地域に住んでいるということです。みなさんは深草地域の仲間なんです。」

なかよし会とのつながりができつつある園児たち。校長先生の言葉を通して、自分たちが地域の一員であることを伝えたい！！

「校長先生の話の深草の仲間って誰のことだっけ？」

「稲荷小学校の人」
「稲荷保育園の人」

「深草小学校」「深草中学校」「砂川幼稚園」…
地域の学校や就学前施設の名前を言う

「学校や保育園の人だけかな？他にはいないかな？」

「赤ちゃん」「お父さん」「お母さん」…家族を言う

「深草の仲間ってたくさんいるね。もう他にはいないかな？」

「風緑」「Kさん」

「なかよし会の人」

「みんなが名前を知らない人でも深草の地域に住んでる人ってもっといっぱいいはるよ」「仲間がいっぱいって嬉しいことやね」

『笹採り』では昨年までは園児たちが風緑に行くための引率が終わった時点でなかよし会の方は帰られていた。しかし、引率や運搬だけでなく、大笹を大事にしたいことや七夕の行事をなかよし会の方も一緒に楽しんでもらいたいという思いから、大笹の設営や園児たちが飾る活動にも参画してほしいと園長から頼んでいた。

「なかよし会と一緒に」　７月５日

今年は笹採りに５名のなかよし会の方が来てくださった。朝から暑く、予想最高気温が３７℃ということもあり、園児たちもなかよし会の方も熱中症対策の保冷剤を包んだバンダナを首に巻き、出発した。

風緑の畑に行く途中で、竹林を見つけ「あそこに竹がある！」「あのくらい大きい竹やったら、僕らの飾り飾れるのと違う？」とショウタ。全長１０m以上あろうかという竹である。ショウタの言葉を受け、なかよし会のHさんが「あんな大きいのがいるのか！遊戯室に入るかなぁ」と真剣に応じてくださった。園児たちとなかよし会の方がこうした会話を楽しみながら歩いていった。

風緑の畑に着くと、すでに用意していただいていた笹がたくさん置いてあった。なかよし会の方や引率の教員が、子どもが笹でけがをしないよう、また持ちやすいように、１本ずつ新聞紙や紐で梱包し、園児たちに手渡してくださった。園児たちがお願いしていた大きな笹はなかよし会の M さんが持ってくださることになった。その大きな笹を見て「遊戯室に入るかな」「天井まであるかな」と園児たちはワクワクした様子であった。

幼稚園に戻り、家に持ち帰る小さな笹をテラスに置き、みんなで遊戯室に集まった。遊戯室には２つのゲームボックスを笹の長さに合わせて置き、その上に大笹が寝かせて置いてあった。園児たちは笹の葉を触ったり、匂いを嗅いだり、寝かせてある大笹をトンネルに見立てて下に潜り込んで遊んだりしていた。しばらくすると誰彼ともなく「笹の葉さらさら…」と歌い出し、教員も仲間になり、園児たちやなかよし会の人と七夕の歌を口ずさんだ。

そして、楽しみにしていた飾り付けとなった。大きな笹を立ててからだと飾り付けるのに、背が届かないことに園児が気づき、寝かせてある状態で飾り付けをすることとなった。中には、笹の横につくった輪つなぎを並べ長さを比べているグループもあった。５つのグループ全てが飾るのを、年少児となかよし会の方に見守ってもらった。そして、いよいよ笹を立ててもらうこととなった。なかよし会の３人の男性が笹を支えたり、持ち上げたりし、「そーれっ！」とかけ声とともに笹が立ち上がった。立ち上がった笹には５本のきれいな虹色の輪つなぎが垂れ下がり、園児も大人も「うわー！」と大歓声をあげた。大笹は園児のお願いした以上の高さがあり、笹の先端が天井に当たり、頭を少し傾けた格好になっていた。輪つなぎは笹の先から吊ったにもかかわらず、床の上に這う状態であった。再び盛り上がった。なかよし会の方も園児たちが喜ぶ様子を見て嬉しそうに目を細められたり、手を叩いて一緒に喜ばれたりした。そして、いよいよ笹を立ててもらうこととなった。

＜考察＞

とても暑い中、大変な思いをして笹を持ち帰った。道中、園児たちは誰一人「暑い」「疲れた」とも言わずに持ち帰れた。なかよし会の方も大変な思いをしてくださったことを園児たちも身近に感じ、笹を持ち帰るという目当てを共有し、頑張れたと思われる。

園児たちの願いを受け入れ、『天井まで届くくらい大きな笹』を幼稚園に運ぼうとなかよし会の方も思いをもっていただいたことで、園児たちの喜びは大きなものとなったと思われる。園に戻ってから、笹を触ったり、匂いを嗅いだりするなど、笹を大事に思ってかかわろうとする園児の姿から、なかよし会の方や教員たちの園児のために…という思いが園児たちにも伝わっていると感じた。

前年度と違い、引率や運搬だけでなく、遊戯室に大笹を立てるところまでをお願いしたことで、複数の大人の人が、自分たちのために力を合わせて大きな笹を立ててくださるのを目の当たりにすることができた。そのことで、大笹を思う園児たちの気持ちはより強くなったのではないだろうか。またグループでつくった長い虹の輪つなぎ（七夕飾り）が大笹より長かったことや飾れたことを見て歓声をあげ、感動を共にしてくださったことも、園児たちの心に響いたことであろう。自分たちのために力を貸してくださること、自分たちの楽しい思いや嬉しい気持ちに共感してくださることなど、笹採りを通して園児たちはなかよし会の方をより身近に感じ、親しみをもったのではないだろうか。

≪笹採りをしたその日の午後≫

短冊に願い事をかいて大笹に飾ろうと計画していた。そしてその願い事には、これまでの取組の中で感じたであろう『地域』の方を思って考えてほしいと私は考えていた。自分のための願い事ではないことは、園児にはまだ難しいのではないかと迷う気持ちもあったが、なかよし会の方とのこれまでのつながりや先日の稲荷小学校の校長先生の話などから、今だったら、自分が地域の一員であることを感じ、地域の方へ思いを馳せることができるのではないかという考えに至り、園児たちに投げかけてみることにした。しかし、どういう言葉で園児たちに伝えればよいか…「地域の方を思っての願い事を」という投げかけは園児にとっては相手を想像しづらいように思い、それぞれが自分なりの相手を感じて考えられるよう「みんなのための願い事」と投げかけることにした。

「みんなの笹・みんなへの願い事」　７月５日

園児たちと大笹を前に、午前中に大きな笹に飾り付けをし、なかよし会に立ててもらった時の感動を思い起こした。そして「この笹は幼稚園に飾ってもらった笹だけど、この笹は幼稚園の人だけの笹だと思う？」と聞いた。園児たちの答えは「みんなの笹」というものだった。「みんなって誰？」と私が聞くと園児から返ってきたのは、自分たちそら組・年少児にじ組・未就園児たまご・ひよこ組・家族・なかよし会・稲荷小学校の人・深草小学校の人、地球のみんなであった。園児からなかよし会の名前が出てきたので、「なかよし会の人も願い事を短冊に書かれたんだよ。」「この短冊には…『ふかくさえんじとちいきのみんなとなかよくあそべるよう』だって」「こっちの短冊には…」といくつかを紹介した。

なかよし会の方の短冊を紹介した後、「今日飾る短冊は『みんなの笹』に飾る短冊だし、自分だけのお願い事じゃなくて、みんなのお願いを考えたいのだけど…。みんなが嬉しいなと思えるような…みんなのことを考えてかこうかな…」と投げかけた。そして、「みんなの思い」に、さらにつながるよう、先日の稲荷小学校の校長先生の「みんなは深草の地域の一員」という言葉を出し、「みんなだったら、深草の地域の方とか、みんなのためにどんな願い事を考えるのかな」と聞いてみた。答えられるかな…と思っていたが、すぐに園児たちの手が複数あがった。ミア「みんなが怪我をしないで大きくなりますように」シュウタ「みんなが嬉しい気持ちになりますように」ナナ「みんながみんなとなかよしになれますように」ハルタ「みんな、元気」など、園児たちは次々に自分の考えた願い事を話した。たくさんの園児たちが自分の思いを伝えたくて手をあげる中、考えている様子ではあるが手をあげようとしない園児たちもいた。そこで「いろいろ、ステキな願い事を考えるなぁ。嬉しいなぁ。でも、みんなのための願い事を考えるって難しいなと思う人もいるのかな」と聞く。するとゲン・ナオキ・ハルコ・ショウタの４人が手をあげた。「そうだよね。みんなが嬉しくなるってどんな願い事がいいか、すぐに決められない人もいるよね。」「今から、みんなが短冊に絵をかいた後に、みんなが考えた願い事を先生が字で書こうと思うけど、今、まだ決まってなくてもゆっくり考えたらいいからね」と言葉をかけ、活動に移った。

＜考察＞

午前中の活動の中で、暑い中、なかよし会の方と一緒に笹を持ち帰った思いや、共に嬉しい経験をしたことで、園児たちは大笹を自分たちだけでなく、なかよし会の方を含む『みんなの笹』であるという思いをもったのだろう。なかよし会の方が短冊に願い事を書いてくださったこともまた『みんなの笹』という思いにつながったと思われる。大笹を『みんなのもの』と感じられたことで、園児たちの、自分だけでない相手のために考えようとする気持ちにつながり、教員の投げかけについて考えようとする姿となったのではないだろうか。

教員の言葉にすぐに自分の考えを伝えようとする園児、じっくりと考えようとする園児など、様々な姿がみられた。その中で普段は自分の思いや考えを活発に発言するハルコやナオキが手をあげない姿は意外だった。教員の投げかけの意味がわからない様子でなく、じっくり考えている様子であった。ハルコやナオキは『みんな』とは誰なのかと相手を模索し、その『みんな』が嬉しくなる願い事を一生懸命考えているのではないかと推察した。こうして、一人一人の園児たちが考えようとする、その姿を大事にしたいと感じていた。個々によって教員の投げかけに対する捉えは様々であったと思うが、みんなで考える機会をもったことで、園児たちは、地域を感じたり、地域のために考えたりするきっかけになったと考える。相手に思いをかけ、相手のために考える、そのことが大事なのだと思っている。

「ぼく決めた！」　７月５日

生活グループの友達と机を囲み、短冊に絵をかき始めた。絵については園児の思いに任せることにした。どんな絵をかいているか様子を見ると、大きな笹に自分たちのつくった輪つなぎをかいている園児が多くいた。それぞれがじっくりと取り組んでいる。笹や飾りを大事に思い、気持ちを込めてかいている様子が感じられた。絵をかいた園児は、私のところに来て、自分の願い事を伝え、私がそれを文字にしてかくことにした。ほとんどの園児が「みんなが…」という言葉で始まっていた。その後は「なかよくなれますように」「たのしくなれますように」などの言葉が続いた。先ほど発言をしたミアは少し考えて「まちじゅうがはなだらけになりますように」と言った。長い時間、短冊に絵をかいていたアイミはたどたどしく「おおきな…ささにかざって…みんなのねがいがかなうように…」と言った。「この笹（大笹）に飾るみんなの願いがかなうようにってこと？」と私が聞くと首を縦に振りうなずいた。そして先程は考えがまとまらなかった様子のナオキもやってきた。そして「ぼく、決めた！」と言う。「そうなんや！どんな願い事？」と私。「まいにち　はれますように」とナオキ。私は思わず笑顔になり、「ほんまや。毎日晴れたらみんな嬉しいもんな」と返した。

こうして『みんなの笹』に『みんなへの願い事』を書いたたくさんの短冊が飾られ、その日の終わりに、クラスみんなで「この願い事がかなうといいなぁ」と言いながら笹を眺めた。

＜考察＞

短冊にかかれた絵から園児たちが笹や飾りを大事に思い、そして教員の投げかけを受け止め、取り組もうとする思いが感じとれ、とても嬉しく思った。また、園児たちの願い事が、その子なりの『みんな』への願い事であり、教員の願っていた『地域を思う』ことも含まれているように感じられた。

ミアの言った「まちじゅうが…」という願い事は、その時の活動のひとつであった次週

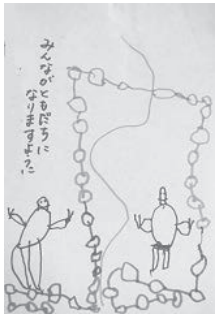
の活動（地域の方に自分たちの育てた花や野菜の苗をプレゼントする）を見通して出てきたものだと考えられた。いろいろな経験が園児の中で重なりあっているのだろう。アイミの願い事もまた、自分の思う『みんな』だけでなく、『みんなのために』考えたクラス全員の願い事がかなうという、とても広い意味での『みんな』で あった。アイミの捉え方や思いの深さを嬉しく感じた。そしてナオキの願い事も、いろいろ考えを巡らせ、多くのみんなが嬉しいと感じる願い事を考えたのだろうと、とても愛おしく思った。一人一人の園児たちが自分なりの『みんな』を想像し、『みんなのために』と願い事を考えられたことを大事に受け止めたいと思ったひと時だった。

＜まとめ＞

今年度、笹採りをなかよし会に引率・運搬だけでなく、設営をしてもらったことで、自分たちの願い（天井まで届くぐらいの大きな笹がほしい）がかなえられた実感をもった。暑い中、一緒に出掛けて、自分たちもなかよし会の方も同じように重い笹を持ち帰ったという大変さも共有できた。そしてその笹を苦心して設営してくださり、思ったより大きく、自分たちの輪つなぎが見事に飾れて立派だったことから達成感を共有し、感謝の気持ちがより膨らんだ。一緒に参加して楽しい、嬉しいだけでなく、なかよし会の方へのさまざまな思いがより深くなった。

なかよし会を始め、様々な地域の方との交流の中で、園児たちは地域の方に支えられて過ごしていることを感じ始めている。稲荷小学校の校長先生の言葉は、園児たちの感じていたことを意識化できる言葉であり、自分たちも地域の一員であることに気付くチャンスであるととらえた。保育の中で校長先生の話を振り返り、園児たちと地域のことを考えたことは「あの人もこの人も深草の地域の方だったんだ」「そして自分も地域の一員なんだ」と園児なりに感じとる機会となった。

教員が思っていた以上に園児たちは『自分』のためではなく『みんな』のための願い事を感じたり、考えたりしようとする姿が見られた。５歳児になると、自分の周りの身近に思えたり、かかわったりする人だけでなく、もう一回り大きな地域の方へも思いが寄せられるようになることがわかった。自分たちを大事に思って下さる地域の方やその地域の方を含めたみんなのために…ということに思いが至ったことは、なかよし会を始め、地域の方々との触れ合い、さまざまな思いの共有が大きな要因となっていると思われる。



エ　地域に広がる園児の思い

毎年 PTA 主催のバザーと園児たちの遊ぶコーナーがある『こどもひろば』が 7 月第 1 土曜日に開催される。また、なかよし会の方がかかわられる喫茶の部は保護者や地域の方、園児が一同に集まる催しでもある。その中に 5 歳児の園児たちが売り手となるコーナーが設けられている。今年度は既存の商品（昨年度までは購入してきたパン）を扱うのではなく、園児が地域の方に思いを込めたものを手渡したいと『花や野菜のプレゼントやさん』を計画した。

花や野菜を育てよう
～種まきからプレゼントやさんまで～

年少の頃から栽培に関心をもっていた園児たち。その姿を今年度もつなげたい…。そのためにはどんな取組ができるかな…

夏に咲く花や野菜ってどんなのがあるかな…。育てたい花や野菜は何かな…

「トマト」「すいか」「きゅうり」「ゴーヤ」…昨年度育てた野菜を思い出した様子。

「いろいろあるね」他にも知っているものがあるかも知れないね。探しに行ってみるね。
教員が種苗店に行き、野菜や種を購入し、保育室に並べて置いておく。

地域の方に、幼稚園の取組を伝えたい…。園児たちの育てる花や野菜を地域の方にプレゼントできるといいな…

「あさがお知ってる！ぼくこの種蒔きたい」「この花（クレサンセマム）ぼくの家に咲いてる」

自分の思いでまきたい種を決める。１つの種を１人でまく、複数でまくなど人数は様々。

自分でまきたい種を決めて育てることで、自分の花（野菜）への思いが深まるのでは…。
「どの種をまきたいか考えておいてね」

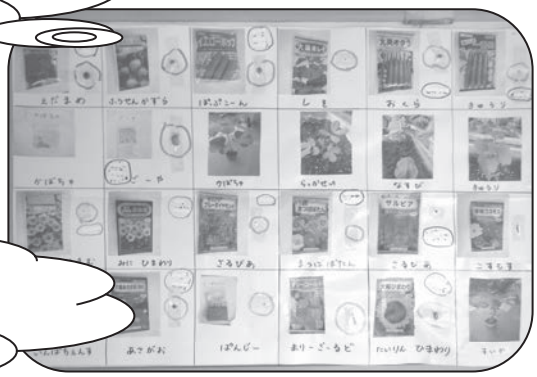
５月２日（月）種まきをする

「幼稚園が花畑になったらいいな…。そしたら、みんなに見に来てもらおう」

（種をまくために土に筋をつくるのを見て）
「風緑の畑みたい」

種まきの日
その後の成長を楽しみに思えるよう、袋から出した種をひとつ教員の用意した表に貼っておく。

「この花の種、こんなに小さいんや」
「この種がこの中で１番大きいな」



数日後

「私の種、芽が出てきた！」「ぼくのはまだ出ぇへん」「水やり行ってこよう」

「ぼくの朝顔大きくなってきた」「ぼくのブルーサルビアも大きくなってるで」

自分で選んだ種を大事に思っているのだな…嬉しいな。思いが続いていくように、生長の様子を写真に撮って貼っていこう。

生長に合わせて、植え替え、支柱を立てるなどを園児と一緒にしていく。

風緑の畑で草引きをしていて…「この草、ポップコーン（の葉っぱ）みたい」
交流活動で行った小学校の花壇を見て「マリーゴールドの花が咲いてる」

「このお花全部咲いたらすごいな！」「お花やさんみたいやな」「みんなでお花やさんする？」

「子どもひろばで（ＰＴＡ主催のバザー）、お花や野菜の苗のプレゼントやさんをしてみない？」

「花や野菜の絵をかいた苗に付ける名札（「ぼくたち　わたしたちが育てた◇◇です」）をポリポットにつけよう」

「お花や野菜のプレゼントやさんの時に♪ありがとうの花♪の歌を聞かせてあげよう」（子どもたちの歌をＣＤに吹き込みＢＧＭにした。）

『好きな花や野菜をどうぞ　ふかふかプレゼントやさん』の看板にみんなで絵をかいて貼ろう」

「お花屋さんです。来てください」　７月９日

子どもひろばの当日。時間を割り振り、生活グループ（＊）ごとにプレゼントやさんをすることにした。

前日、プレゼントやさんは何をするのか…と当日の役割について相談をした。「いらっしゃいませって言う」「ありがとうございましたって言う」「お花と野菜、どうですかーおいしいですよって言う」「（苗はポリポットに植えてあるので）大きい植木鉢に植え替えてくださいって言う」などのいろいろな声があがった。

しかし、当日は、どのグループの園児も初めての経験のためか、なかなか声が出ない様子であった。「これください」とお客さんに言われても、無言で受け取り、袋に入れるのも自信がない様子でなかなか手渡せない様子であった。教員が率先して声を出し、「いらっしゃいませ！」「お花と野菜どうですか？」と言ったり、園児たちと一緒に言ったりした。園児たちの保護者もお客さんとして来てくれた。ホッとしたそして嬉しそうな表情で「これ（ミニひまわり）ミアが種蒔きしてん」と自分が育てた苗を伝え、袋に入れて手渡した。母親も「こんなにたくさんあるなんて（苗の数は２００個以上あった）…すごいね」「ではこれください」や「ありがとう」と、ミアや同じグループの園児に声をかけられていた。園児たちも、苗を袋に入れて手渡し「ありがとう」と言葉を返していた。お店のやり方がわかってくると、率先して自分から袋を用意し、お客さんが選んで来られた苗を袋に入れるようになった。声も出るようになり、「お花のプレゼントやさんです。来てください」「これは朝顔です」、「これはミニひまわりです」と普段から活発に話すアヤノが大きな声で呼びかけた。花の苗を受け取ったお客さんは「ありがとう」とアヤノに声をかけられた。ヒナノが袋に入れて渡したお客さんはヒナノに目線を合わせ「ありがとうね」と言われた。ヒナノも小さい声で「ありがとう」を返した。中には「種から育てたの？すごいね。大事に育てるからね」と声をかけてくださる方もいた。だんだんと「自分が渡したい」という思いが強くなってきて、それまではいくつかの苗を一つの袋に入れていたのが、グループの子ども全員が入れようとするので、一つの苗を一つの袋にいれるようになり、たくさんの袋を持って帰られるお客さんが増えてきた。お客さんに手渡す園児を見ると、どの園児も両手で袋を持って大事に手渡している。「ありがとうって言ってくれはったなぁ」「みんなの育てた花や野菜をもらって喜んでくれはって嬉しいなぁ」と私も嬉しくなり、園児たちに声をかけた。

＊生活グループ…いろいろな友達とかかわること、また責任をもって当番活動（弁当時の準備・飼育動物の世話など）をすることを願って、教員が意図的に組んだグループ（1グループ４～５人で現在５つのグループがある）である。

＜考察＞

当日は、顔を知らない地域の方とのかかわりに、どの園児もかなり緊張した様子であった。その中で最も身近な大人である保護者が、お客さんになって言葉をかけてくださった

ことを皮切りに、園児たちがお客さんに対応しようとするようになった。そして、見ず知らずの地域の方の対応へとつながっていった。

プレゼントやさんに来てくださる方が喜んでくださったり、「ありがとう」と声をかけてくださったりしたことで、自分のしていることを相手が喜んでいると園児が実感したのではないか。そしてその思いが自分から率先して手渡したいと袋に入れようとする姿につながっていったと思われる。

前日の話し合いで、お客さんに自分の育てた苗やポリポットから植え替えて育てることについて伝えたいと思っている様子からこれまで世話を続けてきた苗に愛着をもっていることが伺えた。お客さんにその苗を両手で大事に持って手渡す姿からも、今回、活動の内容を見直したことで、自分たちで育てた大事なものをプレゼントするということは気持ちを込められることになり、有意義な活動となった。そして、地域の方に、大事に育ててきたものを喜んで受け取ってもらえたことが園児のより大きな喜びとなった。地域の方に喜んでもらえたことを実感できたことは園児たちの誇りとなったのではないだろうか。いろいろな地域の方と互いの気持ちを通い合わせるかかわりができた機会となった。

「知らない人が『ありがとう』って言ってくれはった」　７月１１日

翌週の月曜日、こどもひろばの『お花や野菜のプレゼントやさん』について思いを出し合う機会をもった。地域の方とのやりとりの中で、嬉しいと感じたことはどんなことかを尋ねてみた。

「お客さんがいっぱい来てくれて嬉しかった」とアヤノ。「買ってくれた人がニコニコしてた」（「買ってくれた」ではなく、正確には「もらってくれた」である。しかし、園児たちはお店をしたという思いがあり、「もらう」という表現ではなく、「買う」という表現をしているのだと思われる）とミア。「ゴーヤありますよって言ったら、『ありがとう』って言ってくれた」とシュウタ。「いろんな人が（苗を）袋に入れたら『ありがとう』って言ってくれた」とヒナノ。「お母さんが『ミニひまわりちょうだい』って言ってくれて嬉しかった」とユウタ。「知らない人が『ありがとう』って言ってくれた」とカズオ。たくさんの園児たちが自分の感じた嬉しい気持ちを話していた。その内容から、自分の育てた花や野菜の苗をもらってくれたこと、そして、もらってくれたたくさんの人が自分たちに「ありがとう」と言ってくれたことに喜びを感じている園児が多いと感じた。「知らない人がたくさん来てくれたよね。深草の地域にはたくさんの人がいはるのやね。」「みんなも嬉しい気持ちになったけど、もらった人たちもみんなのおかげですごく嬉しい気持ちにならはったと思うよ」と言葉をかけると照れくさそうな、でもどこか誇らしげな表情の園児たちであった。

＜考察＞

園児たちの発言から、教員が気づいていない地域の方とのかかわりがたくさんあったことがわかった。そして、その中で嬉しい気持ちをたくさん感じていたことが教員にとって

も嬉しかった。カズオの「知らない人が『ありがとう』って言ってくれた」という言葉に、初めて出会う地域の方が「ありがとう」と言ってくれたことが、喜びをより大きいものにしたのではないかと感じられた。自分の思いを話したり、友達の思いを聞いたりして、自分たちの取組を振り返ったことは、喜びを共有したり、確かめたりする機会となった。そして園児の取組は自分の住む深草地域の方の喜びにつながったと教員が伝えたことで園児たちの喜びが“地域の一員である自分の価値を感じる”ことにつながったのではないだろうか。

「ハルコたちの（育てた）花や～！」　７月２２日

その後「先生、幼稚園に来る道で、こどもひろばの花（自分たちの育てた苗のこと）が植えてあるのを見つけた！」「私も見つけた！」と嬉しそうに報告する園児たちが出てきた。「そうか。大事にしてくれてはって嬉しいな」と私。プレゼントした苗には、園児たちのかいた絵と苗の名前のかいた名札をつけていたので、自分たちの育てた苗であることが分かったようだ。私は周りにいた園児たちに、「朝、来る時に、こどもひろばの時の花を植えてくれてはるお家を見つけてたんやって！」と知らせながら、みんなで一緒に見に行ければいいなと思っていた。しかし、その思いを実現できないまま、夏休みに入ってしまった。

夏休みに入った直後、園で泊まった宿泊保育の中で、地域を散歩した時のこと。先頭を歩いていた私は、通りがかりの家の玄関前プランターに目が止まった。そこには園児たちのかいた名札がさしてある名札が置かれていたのだった。思わず「あーっ！見つけた！」と言う私の声に園児たちが集まった。「あっ！ハルコたちの花や！」とハルコ。「これ（名札を指さして）ユウタくんがかいた絵や」とナオキ。「先生、初めて見つけてん。こうして大事に育ててくれてはって嬉しいわ」と私。「ほんまやー。これはふうせんかずらやな」などと口々に言いながら、園児たち全員がそのプランターを囲んで喜んでいる。「誰のお家かなぁ、たくさん持って帰ってくれてはったんやな」と喜び、散歩を再開した。しばらく行くと、また別の家の前で、「あっ青じそや。でもこれはこどもひろばのとは違うな」とヒナエとリサコの会話が聞こえてきた。その後も家々に置かれてある植木鉢やプランターなどを見ながら、散歩を楽しんだ。

＜考察＞

・プレゼントやさんをするにあたって、次のような思いで花や野菜の名前をかいた園児の手作りの名札を苗につけた。

＊苗は園児たちが丹精こめて育てたのだということをわかってほしい。

＊地域の方が家に持ち帰った後も園児たちの思いを大事にしてほしい。

＊植え替えの際に名札をつけて軒先に置いてもらえたら、通りすがりに、園児たちが見つけることができ、地域とのつながりを感じられる。

こどもひろばの後、数人の園児たちが地域で、自分たちが手渡した苗を見つけ、大事に植えてもらっていることがわかり、喜んでいた。クラスの話題にそのことを取り上げたことで園児たちの地域への思いが深まっていったと思われた。しかし、教員は一度も見たことがなかった。クラスのみんなで見ることができたら、自分たちのしたことがこうして大事にされているという思いを共有できると考えていた。

そのような機会がなかなかもてずにいたが、宿泊保育の散歩の時に偶然、発見でき、感激した。園児たちの喜びも大きかった。園児たちの手作りの名札があったことで自分たちの手渡した苗を見つけることができ、みんなで地域の方が大事にしてくれているという確かめができた。自分たちのしたことが地域の方の喜びとなっていることを実感した大きな出来事であった。そして、その後も軒先に植えてある植栽を見ては「これはどうかな…」と興味をもって見ていた園児たち。たくさんの地域の方が大事に思ってくれているという思いから、期待感をもった様子であった。自分と地域のつながりを感じることのできた散歩であった。

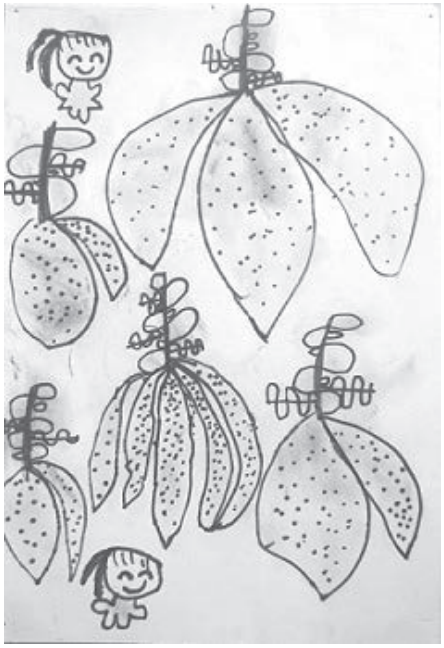
＜まとめ＞

こどもひろばのお店屋さんは、従来から引き継がれている取組であったが、既存の商品を扱うものであった。昨年度、園児たちは、事前にお客さんが買われたたチケットと PTA が購入してこられたパンに交換してお客さんに渡すというお店屋さんをしていた。今年度はそれを見直し、園児たちが思いを込められるものを手渡したいと『お花や野菜のプレゼント屋さん』を計画した。自分で種を選び、種をまき、育てるという活動は、「自分が大事に育てた」という実感を伴う取組であった。数か月に渡り継続して取り組んできたことで、こどもひろばで手渡すときに、園児たちの苗に対する思いは深まっていた。取組の見直しをしたことで、ただ、物を手渡すだけでなく、思いも伝わり、地域の方の喜ぶ姿がより嬉しい気持ちとなり、園児の喜びとなったのではないかと考える。従来の取組を見直し、見通しをもって保育計画を立てたことが園児の栽培物への思いを深めたり、地域の方たちとの思いを通わせる機会となったりした。

また、こどもひろばでの取組は、地域にはたくさんの人が住んでいて、知らない人もたくさんいることを知る機会ともなった。そして、初めて出会う地域の方から、「ありがとう」「大事に育てるしね」と言葉をかけてもらうなど温かくかかわってもらったことは、知らない地域の方に対しても親しみをもつ機会となったと思われる。その経験が自分の住む地域に対する愛着心にもつながってくるのではないだろうか。

そして、こどもひろばの振り返りの中で、自分たちのしたことが、たくさんの人の喜びにつながったことをクラスのみんなで共有し、地域の方への親しみが増した。さらにお泊り保育で、手渡した苗が大事に育てられていることを目の当たりにして喜び合った。苗をプレゼントしたことが媒介となり、地域の方たちの反応、手応えを実感できた機会となったと思われる。「地域の方に喜んでもらえている」「地域の方に大事にしてもらっている」

と感じることは、自分たちが役に立ったという思いや地域での自分の価値を感じることにつながる。すなわち、地域の一員としての自己有用感をもつという、園児の育ちとつながったと言えるのでなはないだろうか。



②　学校評価のシステムの活用から地域に開かれた教育課程の編成をめざして

ア　地域に開かれた教育課程の編成に向けて

学校運営協議会の理事の方に教育課程を発信し、保育参画していただいた意義や保育の中での位置づけを伝えようと、１学期の各学年の年間指導計画を第２回理事会（８月開催、案件：前期学校評価）にて提示した。そのことが教育課程を社会に開くことだととらえ、試みた。その年間指導計画は今年度、「地域との連携」の欄を設け、編成し直したものである（Ｐ７８資料１参照）。年間指導計画は、幼稚園教育要領に基づき、京都市の編成要領をもとに深草幼稚園で作成したものであることや各項目についての説明を行った。

各理事の方は今まで教育指導計画を見られたことがなかったので、その複雑さや細かく書いているものをすぐさま読み込まれるのは難しく、説明が終った後、しばし沈黙が漂った。元京都市立幼稚園園長をされていた理事の方も、その場の“絶句”の状態からどのように説明すればよいのか戸惑われた様子であった。

このような年間指導計画を提示しても保育参画の意義や保育の中での位置づけが伝わりにくいことを痛感し、本園の教職員で共有している年間指導計画をそのまま提示するのでなく、わかりやすい教育課程に改善する必要性を感じた。

折りしも、本調査研究事業の第１回調査研究実行委員会（９月開催）において、この経過を話したところ、津金美智子大学教授より、社会に開かれた教育課程は地域の方々や保護者にわかりやすく、伝わりやすいもので、視覚に訴えるものが良いのではないかと指摘があった。

そこで、今回、本園の年間指導計画の中から、学校運営協議会や地域の方々の保育参画や保育所、小学校や中学校などとの連携の部分に絞って、『京都市立深草幼稚園年間指導計画（地域とともに)』（Ｐ７９資料２参照）にまとめた。

園児の発達の様子に合わせて、その時期のねらいや内容をまとめた。なお、４歳児と５歳児の活動は同じ（幼小連携は５歳児のみ）なので、両学年を併せて編成した。そして、学校運営協議会や地域の方の保育参画や他校種間連携の活動の内容と写真を『活動と園児の様子』の欄にした（改善の時期の都合上、３学期は平成２７年度の活動の様子を紹介している)。ねらいや内容に沿ってこれらの活動を展開していることと幼稚園教育要領とのつながりがわかるようにと『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿　社会生活との関わり』を併記した。その中で時期や内容に沿って、つながりがあるものを抜粋して載せている。

イ　関係者評価をいただくことで

年間指導計画を編成し直し（Ｐ７９資料２参照)、『なかよし会や地域の方にかかわってもらって』（Ｐ８６資料３参照）とともに臨時理事会にて提示した。以下は各理事から出されたご意見である。

・回を重ねるごとに子どもたちと親しくなってきている。前は距離があったが、小学校と同じ名前に一体化され、分かりやすい。「なかよし会」の名前も定着してきて、子どもたちも呼びやすくなってよかった。子どもが理事一人一人の名前を覚えて、幼稚園の外で出会った時も挨拶をしてくれて嬉しい。
・カレーパーティーの時の招待状の子どもの絵を我が家で話題にしていた。サツマイモパーティーの招待状も同じ子どもだった。明らかに“私”を知ってかいていることがわかり、あの子どもがこんなに成長したと家族で見比べてすごいなと感心していた。
・保護者の代表でなかよし会にかかわっている。こんなになかよし会によくかかわってもらっているのだとよくわかった。それを他の保護者に伝えないといけないと思っている。預かり保育で読み聞かせや昔遊びをしてもらう時は１００％に近い子どもたちが参加している。用事で帰らなければならない子どもが参加できなくて悲しいと泣くほどである。
・この年間指導計画では、たくさんの行事があり、その中の少ししか自分が参加していないので申し訳ない。年間でこれだけあれば、他の保育内容が薄まっていないのか、他の保育とのつながりがもう少しわかればよいと思う。
・小学生とのかかわりの中で感じたことだが、深草幼稚園での体験が活きていると思う。体験を大事にされていることが嬉しい。地域の子どもをこのように育ててもらい、自分が役に立てているかどうかわからないが、感謝したい。一つ提案だが、小学１年生はとても個人差が大きい。文字や数字教育も大事なことではないか。詰め込むのではなく、遊びながら文字や数字に慣れていけばどうか。たとえば昔遊びのカルタを預かり保育に取り入れることもできないだろうか。

親しみが深まっていることや活動の内容が有意義であることなど、実際に保育参画でかかわってもらったことからも実感していただいた。また、幼稚園での取組だけでなく、なかよし会の各家庭においても話題になり、このように幼稚園の取組が地域に伝わっていることも伺えた。

一方、発信が不十分であり、なかよし会の取組だけでなく、その意義がなかなか保護者に伝わっていない現状も再確認された。代表の保護者がその役割を担うと申し出られているが、幼稚園がなかよし会と保護者をつなぐ役割を担わなければならないと痛感した。

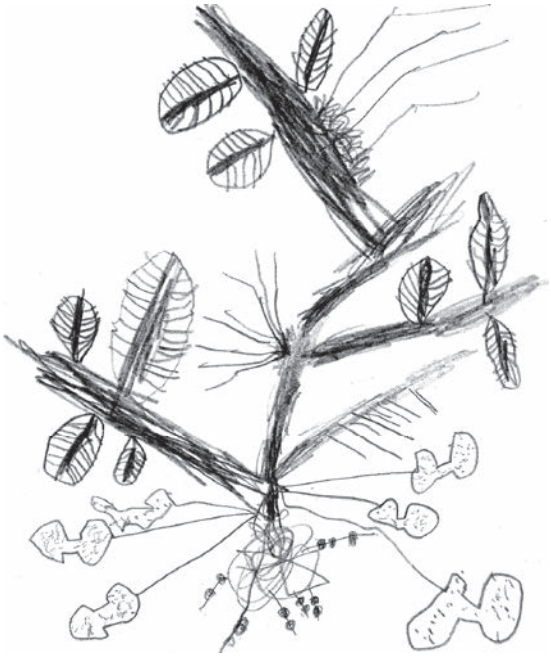
さらに、なかよし会の方が小学生とかかわってくださっていることから幼稚園の先を見据えて文字や数字への関心についてもご意見をくださった。遊びの中でということを強調されながら自分たちができることをやろうと提案してくださった。

ウ　年間指導計画（地域とともに）の編成からから見えてきたもの

年間指導計画を保育参画してくださっている方によりわかりやすく、伝わりやすいもの

にしたいと考えて改善をした。その結果、年間を通しての取組の様子がわかり、「地域の子どもをこのように育ててもらい、自分が役に立てているかどうかわからないが、感謝したい」との言葉を寄せてもらった。また、かかわっていただいた園児の成長を理事の方の家族とともに感じていただき、幼稚園での取組が伝わっていくこともわかった。保育参画してもらったことや、そのときの園児の様子を目に見える形で示したことが、なかよし会の方のやりがいになったり、地域の子どもを大事に思う気持ちが高まったりして、さらにかかわっていこうとしてくださるのだと思われる。

一方で、なかよし会の理事の方だけでなく、保護者に向けて、幼稚園と地域とのかかわりを発信することが不十分であり、幼稚園が核となり、なかよし会や地域の方とのかかわりの内容や意義を保護者に向けて発信していく必要性を感じた。今年度、２学期の『市民農園　風緑』でのサツマイモ掘りの園外保育を自由参観日に設定した。保護者が、なかよし会や風緑のＫさんが園児たちにかかわってもらっている様子を見られた。なかよし会の方にサツマイモを掘りやすくしてもらったことやＫさんが栽培物への思いを園児たちに伝えられる姿を保護者が直接目にされた。「地域の方にかかわってもらうことが少なくなってきている今、ありがたいことですね」「野菜がうまく育たないこともあるということや手間暇をかけて育てられていることや、食卓に何気なく並ぶのではないことなど感じる貴重な体験ができていますね」など感想を寄せられた。なかよし会の方々の園児たちへの愛情やＫさんの園児に伝えたい栽培を通しての深い思いなどに直接触れられる機会となった。今後もこのような機会をもち、幼稚園の取組の中で、いろいろな人とのかかわりの中で、園児たちが豊かに育つことを発信していくとともに地域と保護者をつなぐ役割を担っていきたい。



【らっかせい】

（4） 成果と課題

① 幼稚園と学校運営協議会が連携を深める体制づくり

園児に親しみやすく、呼びやすい名称として学校運営協議会が「なかよし会」となった。また、その名前は深草小学校の学校運営協議会と同じ名称である。「小学校に進学して、なかよし会の方の名前を家で聞くと、見守ってもらっていてありがたいなと安心します」という声も聞かれる。進学後も園児たちや保護者が同じ方々に同じようにかかわってもらえるという安心感にもつながった。

そして、なかよし会の方とのかかわりを重ねていくと、一人一人の名前を園児たちが覚え、幼稚園の外で出会った時も親しみを込めて呼びかけるようになった。その様子をなかよし会の方が幼稚園に伝えてくださり、その嬉しさを共感している。もちろん、なかよし会の方の愛情をもってかかわってくださることや楽しい思いがあるからこそ園児たちは名前を覚えていく。その人との楽しいかかわりをもとにその人の名前を覚え、さらにかかわろうとし、つながりが深くなっていった。

また、この数年間、学校運営協議会の理事の方々には、様々な場面で相談したり、助けていただいたりしている。さらには、理事の方々が核となって幼稚園からのお知らせ等を地域に配布する体制も整い、常にお力をいただいている。このような連携を深める体制づくりは一朝一夕にできるものではない。幼稚園の管理職を中心に信頼関係をつないでこそ、連携が深まるのだろう。今後とも、幼稚園の組織で努力していきたい。

② 園児の育ちを引き出す保育のあり方

なかよし会や地域の方とのかかわりを一過性のイベントのように展開するのではなく、毎日の遊びや生活の流れを大事にしながら、教員が地域と幼稚園の保育を連動できるような保育計画を立て、園児へのねらいをしっかりもち、保育を創造していった。地域と幼稚園をつなぐ環境構成の工夫や教員の言葉かけ、そして、なかよし会や地域の方とのかかわりにより、園児たちの興味や関心が高まっていった。そしてそのかかわりの中で学んだことから、自分たちの遊びを広げたり、経験したことを遊びに取り入れたりしていった。このように地域での経験が、幼稚園の中でも園児たちの主体的な遊びにつながっていった。

また、教員がなかよし会や地域の方に親しみを感じ、信頼関係を築くことで、園児が地域の方々の味わいのある人柄に触れることができた。まずは教員が地域との触れ合いや活動を楽しむことで、園児たちも安心感をもってかかわるようになった。

このような実践の中で得た、なかよし会や地域の方を通しての学びは、園児の思いや心の奥に蓄積され、単に「知っている」ということで終わるのでなく、自

分たちの生活や遊びに大いに取り入れることになった。また、クラスの友達と共通の話題になったり、思いを共有する機会となったりして遊びが深まっていった。

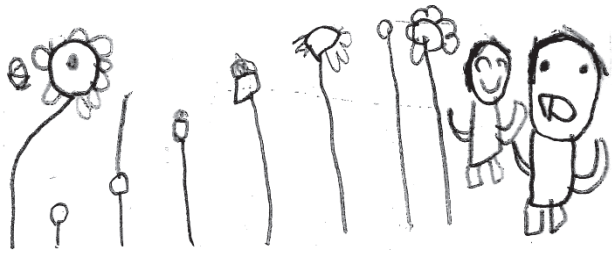
特に、５歳児では、「自分の周りの人」という範疇が家族や友達、教員だけでなく、地域へと広がっていった。実際に出会ったり、触れ合ったり、かかわったりすることや「同じ深草地域の・・・・」という言葉の意味が実感できたことを通して、同じ地域に住む仲間だという認識ができていった。そして、なかよし会や地域の方と実際に出会ったり、一緒に遊んだり、かかわってもらったりすることが楽しい経験として残り、その楽しさや嬉しさから相手への親しみにつながっていった。親しみを覚えて次にかかわる時には、より楽しさや嬉しさが増し、より深く親しみを感じていった。そして、愛情をかけてもらったことや一緒に様々な思いを共有したことなどから感謝の思いが生まれた。毎日一緒にいなくても、離れていても、その方々が地域の仲間であり、身近に感じて思いを寄せたり、思いを馳せたりすることができるようになっていった。だからこそ、その方々のために何かをしてあげたい、喜んでもらえるようにするにはどうすればよいか等、考えるようになった。「地域に貢献する」というまでには至らないかもしれないが、幼稚園の園児として先生と一緒に、自分たちができることを考え、やってみて、それを受け入れてもらえた嬉しさを感じ、地域での自分の存在を実感できたと思われる。

③　地域とのかかわりの取組や園児の育ちを発信することの意義

今回、なかよし会や地域の方の保育参画から園児の育ちを見つめてきたが、やはり、幼稚園だけではなし得ない深い学びや豊かな心情を園児たちに育めることを実感した。地域の環境や人材の活用という教育的意義を大いに感じた。そしてそういった園児の育ちを、保育参画していただいた方々に発信することにより、やりがいや存在意義を確かめていただけたり、今後の意欲へとつながられたりすると思われる。

また、保護者がなかよし会や地域の方がかかわってくださる取組の様子を、直接見られたサツマイモ掘りの自由参観は、「保護者と地域をつなぐ」有効な機会となった。今後、このような機会を定期的にもつことも視野に入れていきたい。

今後も幼稚園の組織的取組としての地域とのかかわりの様子（年間指導計画）やそこで得られた園児の育ちをよりわかりやすく発信することをめざし、幼稚園が地域や保護者、園児をつなぐ核となれるよう研鑽を積んでいきたい。



（資料１）　　年間指導計画（５歳児）　　地域との連携

<table>
<tr><td>期</td><td colspan="4">Ⅰ</td></tr>
<tr><td>月</td><td colspan="4">４・５月</td></tr>
<tr><td>幼児の姿</td><td colspan="4">・年長児になったことを喜び、自信をもって行動するが、中には新しい環境に緊張や戸惑がある幼児もいる。
・遊具、教材、自然など環境に積極的にかかわり、遊びに取り入れたり必要なものをつくったりしていく。
・年下の子どもとかかわりをもって遊んだりやさしく接したりする姿が見られる。
・動植物の飼育栽培に関心が高まり、親しみをもって世話をしようとする。</td></tr>
<tr><td>ねらい</td><td colspan="4">・新しい環境に慣れ、年長組になったことの喜びや自覚をもち、安定した気持ちで園生活を楽しむ。
・身近な環境に意欲的にかかわり、試したり考えたりしながら、生活に取り入れようとする。
・友達とかかわり、自分の思いや考えを伝えたり相手の思いに気付いたりする。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">内容</td><td rowspan="2">健康・人間関係・環境・言葉・表現</td><td rowspan="2">・新しい環境に慣れ、自分たちで遊びや生活の場をつくっていこうとする。
・２階での安全な過ごし方を知り、約束を守って生活しようとする。
・自分の健康について関心をもち、検診や検査を進んで受けようとする。
・友達と一緒に、戸外で積極的に体を動かして遊ぶ楽しさや開放感を味わう。
・帽子とりや簡単なルールのある遊び等を楽しむ。
・年長組になった自覚を持ち、園外保育や仲良し遊び等幼稚園兄弟に優しくかかわろうとする。
・小学校との交流活動を楽しむ。
・なかよし会やNPO法人「竹と緑」「風緑」の方に親しみや感謝の気持ちをもって、かかわることを楽しむ。
・地域の春の自然に触れることを楽しむ。
・小動物に興味や関心をもち、グループで当番活動をしたり、かかわったりしようとする。
・種まきや苗植えなどをし、生長を期待しながら畑やプランターなどの栽培物の世話を、すすんでしようとする。
・エンドウ豆の収穫を喜び、パーティーを進め、みんなで楽しむ。
・友達と思いや考えを伝え合い、先生や友達と一緒に遊びを創る楽しさを味わう。
・様々な絵本や物語との出会いを楽しみにし、進んで見ようとする。
・様々な素材に親しみ、試したり工夫したりして描いたりつくったりしながら遊ぶ楽しさを味わう。
・いろいろな歌やリズムに親しみ、友達と一緒に歌ったり身体表現をしたりすることを楽しむ。</td><td>環境の構成</td><td>・安心して遊びが展開できるよう遊具の安全点検や砂場の環境設定など教師同士で確認し合う。
・幼稚園兄弟がわかるように表を掲示する。
・遊びの場や遊具・用具などの環境を子どもと共に考えたり用意したり配置したりする。
・かかわりの成果や世話の満足感につながるよう種まきや苗植えから生長の様子がわかるような写真の記録などを掲示する。
・材料の特性がわかり、それを活かした使い方ができるように分類、整理して置いておく。
・遊びや生活に沿った絵本をクラスのみんなで見る機会を設けるとともに絵本を身近に感じられるよう棚に置いておく。</td></tr>
<tr><td>教師の援助</td><td>・年長児になった自覚を認め、共感し自信をもって行動できるよう促したり、励ましたりする。
・信頼関係を築けるよう教師も遊びに加わり、個々の気持ちや考えを受け止めたり、認めたりする。
・友達の良さに気づけるよういろいろな考えや思いを受け止め、ひき出したり、伝えたりする。
・地域の自然に触れる機会を大切にすると共にいろいろな人とのかかわりの中で親しみや感謝の気持ちがもてるよう仲立ちをする。
・一人一人の名前がわかり、なかよし会の人に親しみをもってかかわろうとする姿を認め、子どもの考えが実現できるよう一緒に遊びを進める。
・生き物を大切にする気持ちやグループの友達と一緒に当番活動をする責任感、役割意識の芽生えにつながるように活動の様子を認め、励ます。
・遊びを一緒に創る楽しさを味わえるよう子どもの様々な表現を受け止めたり取り上げたりする</td></tr>
<tr><td>家庭との連携</td><td colspan="4">・園での一人一人の子どもの様子を丁寧に保護者に伝えていき、信頼関係を築いていく。
・家庭訪問や個人面談、日々の対応の中で各家庭の様子や背景なども把握し、保護者の思いを受け止めながら一緒に子育てをしていく姿勢につなげる。
・保育参観や懇談会等を通じて園の教育方針などを伝え理解してもらえるよう、子どもの姿を通して伝えていくようにする。</td></tr>
<tr><td>地域との連携</td><td colspan="4">・昨年度に続いてなかよし会や竹と緑、風緑の方とかかわることを両者が楽しめるよう、事前打ち合わせや思いをつなぐ仲立ちなど、一緒に過ごす機会を大事にできるよう計画する。
・深草の自然に触れたり、栽培に関心をもってかかわれたりできるよう事前の打ち合わせや準備をしておく。
【筍掘り、さつまいもの苗植え・豆ごはんパーティー等】</td></tr>
<tr><td>行事</td><td colspan="4">始業式・入園式・お迎えの会・発育測定・散歩遠足・誕生会・こどもの日の集い・親子遠足・参観日
・クラス別懇談会・家庭訪問・鯉のぼりセレモニー・筍掘り・さつまいもの苗植え・豆ご飯パーティー</td></tr>
</table>